

新制作

2004.2

きらめ

スペインの燦きーラヴェル

～バレエとオペラによる～

TALES FROM SPAIN

オペラ劇場 5回公演

18日(水)7:00、19日(木)7:00、20日(金)7:00、21日(土)3:00、22日(日)3:00

指揮:マルク・ピオレ

演出・振付:ニコラ・ムシン

美術・衣裳:ダヴィデ・ピッツィゴーニ

I オペラ:スペインの時

L'HEURE ESPAGNOLE

作曲:M.ラヴェル(1911年初演)

台本:フラン＝ノアン

<キャスト>

コンセプトティオン:グラシエツラ・アラヤ

トルケマダ:ハインツ・ツェドニク

ゴンサルヴェ:ジョン・健・ヌツツォ

ラミーロ:クラウディオ・オテツリ

II バレエ:ダフニスとクロエ

DAPHNIS ET CHLOE

作曲:M.ラヴェル(1912年初演)

<出演>新国立劇場バレエ団

III バレエ:洋上の小舟

UNE BARQUE SUR L'OCEAN

作曲:M.ラヴェル

(ピアノ曲集「鏡」1906年初演)

<出演>新国立劇場バレエ団

IV バレエ:ボレロ

BOLERO

作曲:M.ラヴェル(1928年初演)

<出演>新国立劇場バレエ団

☆☆☆ オペラトークのご案内 ☆☆☆

<前売り開始日>

2003年11/23(日)10:00～

<チケット料金>

席種	S席	A席	B席	C席
料金	12,600円	9,450円	6,300円	3,150円

※料金は消費税込みです

作品について

オペラ、バレエのジャンルの壁を越えた新国立劇場独自の新しい舞台芸術創造への試み。現代フランス音楽を代表する、最大にして最も個性的な特徴を持つ作曲家ラヴェルは、世紀末の爛熟したロマン主義の後を受け、ドビュッシーと共に20世紀の新しい作風を築いた。フランスに生まれ育ったものの、スペインの血を母方から受け継いだ彼の作品は、スペイン的な題材やボレロ、ハバネラへの愛着を示すものが多くみられる。「ダフニスとクロエ」「ボレロ」「ラ・ヴァルス」といった多くの華麗なバレエ音楽に対して、オペラは「スペインの時」「子供と魔法」の2作品のみ。「子供と魔法」では、オペラとバレエの要素を巧みに織り交ぜ、子供も充分楽しめるファンタジーの世界を描き出している。また、純音楽作品の中にも、多くの魅力的な作品が振付師の創作意欲を掻き立てバレエ化されている。

本公演では、世界を舞台に芸術活動を展開しているニコラ・ムシンにオペラとバレエ両方の演出・振付を依頼し、これまでにないバレエ・オペラ公演をお届けします。バレエ作品へは、新国立劇場バレエダンサー総勢60名が出演の予定です。

●「スペインの時」は、フラン・ノアンのコメディ・デラルテ風の1幕芝居を見てオペラ化を

思い立ったもので、従来のブッフアと一味違う、フランスの粋なエスプリを感じさせる作品。ワーグナーのライトモチーフの技法を巧みに活用し、陽気な登場人物各々に性格と旋律を与え、音楽を聴くだけで愉快的な情景が目に見え、秀作。

●「ダフニスとクロエ」は4世紀ギリシアの作家、ロンゴスの田園叙事詩、“世にも美しい羊飼いの青年と羊飼いの娘のラブ・ストーリー”を読んだ振付師フォーキンが初めてバレエの台本を書き、作曲を“バレエの古臭い伝統とは無縁の作曲家”であるラヴェルに委嘱したものの。

●「洋上の小舟」はピアノ曲集「鏡」の1つで、生まれた町の海辺でラヴェルが見た大西洋の躍動的な波の動きが斬新な和声とポリリズムで表現された作品。管弦楽用に編曲もされている。

●「ボレロ」は1928年ニジンスカ振付、イダ・ルビンスタイン主演で初演後、様々な演出版で上演されているが、なかでも1961年ベジャール振付によるものが最も名高く、且つ頻繁に上演されている。演出・振付のニコラ・ムシンは、「ボレロ」を通して“人間と機械”をキーワードに幾何学的に構築された音楽と作曲家の人間性に迫りたいと語っている。

ものがたり

<スペインの時>

スペインの古都トレドの時計屋。主人のトルケマダは美しい若妻コンセプションに「市役所の時計を合わせに行く日でしょ」と店から追い立てられる。コンセプションは夫の外出を良いことに、愛人達と楽しむ算段で、まずは詩人氣取りの若い学生ゴンサルヴェがやってくるが、時計修理にやっていたロバ曳きのラミーロに見つからぬよう大時計の中に隠し、ラミーロに寝室へ時計ごと運ばせる。次に銀行家のイニーゴが登場、彼も別の大時計に入れて寝室に運ばせ、ゴンサルヴェの入った時計と交換させる。しかし、肝心の時にゴンサルヴェは詩を口ずさんでばかり、イニーゴは腹がつかえて時計から出られず、コンセプションは愛人達に苛立つ一方で、ラミーロに目移りし、彼を寝室に誘う。そこへトルケマダが帰宅。時計の中に潜む二人はそれぞれの時計を買う羽目になる。最後は5人で「本当に役立つ恋人は一人」と愉快地歌って幕となる。

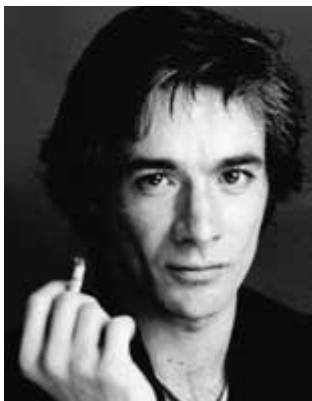


指揮 マルク・ピオレ

Marc Piollet

1962年パリ生まれ。1989年ライニッケンドルフ・ユースオーケストラの音楽監督に始まり、ブランデンブルク劇場の第一指揮者、ベルリン・シベリウス・オーケストラ音楽監督と歴任し、93年から97年はハレ州立フィルハーモニー管弦楽団の第一指揮者、97年からはカッセル州立劇場の第一指揮者兼副音楽総監督を務める。ドイツ国内を中心にヨーロッパにてオペラの指揮やコンサートで経験をつむ。

97年にはハンブルク州立劇場に「椿姫」でデビュー、99年にはシュトゥットガルト州立劇場に「コシ・ファン・トゥッテ」で、2000年は「ラ・ボエーム」でケルン歌劇場にデビューを果たす。2000年ザルツブルク音楽祭では、モーツァルテウム管弦楽団を率いて大成功を収めた。最近では01年「椿姫」でウィーン・フォルクオーパーに初登場、02年にはベルリン・ドイツ・オペラに「オルフェオとエウリディーチェ」でデビュー、10月には「椿姫」で再登場する。



演出 ニコラ・ムシン

Nicolas Musin

1968年ベルギー生まれ。幼少期はアフリカで過ごし、15歳でパリに移りパリ・オペラ座バレエ学校に学ぶ。大学では哲学と美術史を専攻。パリ・オペラ座バレエ団に短期間所属後渡米、アルヴィン・エイリーとともにアルヴィン・アメリカン・ダンス・センターで1年間活動。88年モンテ・カルロ・バレエ団入団、第一ソリストとして古典及びモダンのレパートリーの主要な役を制覇。93年ジャン＝クリストフ・マイヨーに依頼され同バレエ団のための新作「LAMENTO」を手掛け、マスコミから高い評価を受ける。94年ジョン・ノイマイヤーに招かれ、ハンブルク・バレエ団の第一ソリストとなり、「椿姫」アルマン、「シンデレラ」王子、「バーンスタイン」「真夏の夜の夢」等ノイマイヤーのレパートリーの主要な役を踊る。96年よりウィーン国立歌劇場バレエ団、ベルリン・ドイツ・オペラ、バイエルン州立歌劇場バレエ団、

シャンゼリゼ劇場、ポリショイ劇場等欧米のカンパニーのみならず中国や香港でも数多くの作品を創る。最近では01年バイエルン州立歌劇場バレエ団のために「KLEINE ABENT EUER」、シャンゼリゼ劇場のために「LOST & FOUND」を、キーロフ・バレエではファルフルジマートフを主演に配した作品を創作。また、後進の教育にも力を入れ、ハンブルク・バレエ団やマリカ・ベゾラスツォヴァ等国際的なバレエ学校のための創作活動も行っている。役者としての演劇作品への出演や、現代アートへの取り組みなど、ジャンルにとらわれない自由な芸術創作活動で今後の活躍が期待されている。



美術・衣裳

ダヴィデ・ピッツィゴーニ

Daive Pizzigoni

1955年ミラノ生まれ。ローマ大学で建築を専攻、96年アレックスandro・メンディーニの紹介により初個展を開く。87年よりオリベッティとのコラボレーションが開始。91年から93年までヨーロッパデザイン研究所で家具デザインを教える。94年にはチューリッヒ歌劇場にてチエーザレ・レヴィ演出「影のない女」の舞台美術及び衣裳デザインを手掛ける。95年にはウィーン国立歌劇場にてアルフレード・シュニトケの「ジェズアルド」世界初演(ロストロポーヴィチ指揮)の舞台技術及び衣裳を手掛け、好評を博した。96年よりブルガリのシルク製品とカシミア・コレクションのデザインを担当、99年にはフランクフルトでブルガリのためにデザインし、ローゼンタールが制作した磁器コレクションが発表される。他にもソルマーニ(家具)、ルベッリ・アンド・インターフレックス(ファブリック)、バルデリ(タイル)といった企業のデザインも手掛けている。世界初の試みとして、“絵で楽しむオペラ”のシリーズを企画・製作を意欲的に進めている。これまでに英語・イタリア語・フランス語による「魔笛」「カルメン」「蝶々夫人」を出し、2002年秋には「リゴレット」を出版する予定。95年以来、“空っぽの空間の形”がどのような価値を持つか、真の物質として探求できるかという研究に携わっている。また、ミラノ、ローマ、ニューヨークで国際的な展覧会を開催している。



コンセプティオン

グラシエッタ・アラヤ

Graciella Araya

チリ・サンチャゴ生まれ。地元で「リゴレット」マッダレーナを歌ってデビュー、現在までにウィーン国立歌劇場、ジェノヴァのテアトロ・カルロ・フェリーチェ、モネ劇場、ヴェネツィアのフェニーチェ歌劇場、ネザーランド・オペラ、シアトル・オペラ等欧米の主要歌劇場で活躍。レパートリーは幅広く、「カルメン」タイトルロール、「ウェルテル」シャルロッテ、「ばらの騎士」オクタヴィアン、「カプリッチョ」クレロン等がある。最近では英国ロイヤル・オペラやメトロポリタン歌劇場で「リゴレット」マッダレーナ、ウィーン国立歌劇場の「ルル」ゲシュヴィッツ伯爵令嬢や「ルイーザ・ミラー」フェデリーカ、ブレゲンツ音楽祭「コシ・ファン・トゥッテ」ドラベツラ等に出演している。



トルケマダ

ハインツ・ツェドニク

Heinz Zednik

1940年ウィーン生まれ。ウィーンのコンセルヴァトリウムで声楽を学び、64年グラーツ歌劇場と契約、オペラ・デビューを果たす。翌65年にはウィーン国立歌劇場のメンバーとなり、80年に宮廷歌手の称号を授受、94年には同劇場名誉会員になる。メトロポリタン歌劇場、ミラノ・スカラ座、パリ・オペラ座、シュトゥットガルト州立歌劇場、ベルリン州立歌劇場、バイエルン州立歌劇場等世界各地の主要歌劇場で活躍。また、バイロイト音楽祭には70年から80年まで毎年出演。ザルツブルク音楽祭にも参加している。オペラ及びオペレッタのレパートリー数は100にのぼり、「こうもり」アイゼンシュタイン、「ファルスタッフ」医者カイウス、「サロメ」ヘロデ、「神々の黄昏」ミーメ、「蝶々夫人」ゴローといった、キャラクターテノールの役柄が多い。リート歌手としても活躍。04年「サロメ」にもヘロデ役で出演予定。



**ゴンサルヴェ
ジョン・健・ヌッツォ**

John Ken Nuzzo

1966年東京生まれ。イタリア系アメリカ人の父、日本人の母を持つ。95年南カリフォルニア・チャップマン大学音楽科を卒業後、オレンジ・カウンティ・マスターコーラルのソリストに抜擢されデビュー、ロサンゼルス・タイムス紙で絶賛される。またサン・ベルナルディーノ歌劇場「コシ・ファン・トゥッテ」フェランドでオペラ・デビュー。95年帰国。その後一時クラシック活動から遠ざかり、日英バイリンガルのMCとして活動。2000年にはウィーン国立歌劇場のテノール歌手として専属契約を結び、世界的歌手とともに「ビリー・バッド」(新演出)ノービス、「ジャンニ・スキッキ」リヌッチョやウィーン・フォルクスオーパー「ウェストサイドストーリー」トニーを演じ一躍国際舞台での脚光を浴びる。01年にはエバーハルト・ヴィヒター賞受賞、02年にはザルツブルク音楽祭「カンダウレス王」シファックスで出演。世界を舞台に更なる活躍を期待される。



**ラミーロ
クラウディオ・オテッリ**

Claudio Otelli

1960年ウィーン生まれ。ウィーン大学で音楽を学んだあと、ウィーン国立歌劇場のスタジオに所属。その後同劇場のアンサンブルメンバーとして契約を結び、数々のパートを歌って実績をあげる。94年よりフリーとして世界各地で活躍。レパートリーは「青ひげ公の城」青ひげ、「カルメン」エスカミーリョ、「メリー・ウイドウ」ダニロ、「ドン・ジョヴァンニ」や「エウゲニオ・オネーギン」、「ナブッコ」のタイトルロール、「アラベッラ」マンドリカ、「アイダ」アモナスロ、「ワルキューレ」ヴォータン、「タンホイザー」ヴォルフラム、「白ばら」ハンスと幅広い。最近では、01年にフランクフルト歌劇場「トスカ」スカルピア、エッセン州立歌劇場「ローエングリン」テルラムント、02年はフランクフルト歌劇場「サロメ」ヨハナーン等に出演した。

新国立劇場バレエ団

New National Theatre Ballet, Tokyo

新国立劇場バレエ団は、1997年、新国立劇場の開場とともに活動を開始。芸術監督には開場当初の島田廣に引き続き、99年7月より牧阿佐美が就任、国内外の振付家、指揮者、デザイナーなどと連携し、海外からのゲストダンサーも加えながら多彩な舞台創りを続けている。ダンサーは、活動の中核をなすシーズン契約ダンサーと、演目によって出演する登録ダンサーからなり、いずれもオーディションによって優れた才能をもつダンサーが選ばれている。これまでの上演作品は「白鳥の湖」「眠れる森の美女」「くるみ割り人形」などの古典バレエの名作をはじめ、英国人振付家フレデリック・アシュトンの「シンデレラ」、現代バレエの巨匠ジョージ・バランシン振付の「テーマとヴァリエーション」など、世界各国から選りすぐった作品を次々と披露している。また、「梵鐘の聲～平家物語より～」(石井潤振付)、「舞姫」(望月則彦振付)、「悲歌のシンフォニー～第3楽章」(金森穰振付)など、日本人振付家によるオリジナル作品にも取り組み、レパートリーは年々幅を広げつつある。

▲このページのトップへ

TITLE:スペインの燦き

DATE:2004/02/18 09:29

URL:<http://www.nntt.jac.go.jp/test/spain/spain.html>